

ムサビの教員が選ぶ

美大生におすすめの本

Recommended books for art students.

視覚伝達デザイン学科
白井敬尚教授

『海の都の物語：ヴェネツィア共和国の一千年』

『海の都の物語：ヴェネツィア共和国の一千年 続』

塩野七生著，中央公論社，1980-1981



塩野七生の数ある著作の中で語られるイタリア史の範囲は、大著『ローマ人の物語』を筆頭に古代、中世、ルネサンスを経て産業革命前夜までに及ぶ。塩野の著作は政治、行政、宗教、産業・技術、科学、戦争、商業、文芸と多様な領域へ踏み込んでおり、その視座は客観的であろうとする記述にあっても抑え切れないほどの熱や情が溢れ出ている。本書は北イタリア地中海の商業・貿易都市として繁栄を極めた都市国家ヴェネツィアをめぐる創世記から終焉までの壮大な物語だ。都市国家論でありながらも、魅力的なのは時代を彩る多様な人物たちの存在だ。出版・印刷に関していえば1500年前後のルネサンス期のヴェネツィアで最先端の文学書を印刷出版したアルド・マヌツィオ（アルダス・マヌティウス）の登場に象徴される。また、ヴェネツィア図書館長であり、枢機卿だったピエトロ・ベンボも同様。ピエトロ・ベンボは1928年にイギリス・モノタイプ社からリリースされた活字「ベンボ」の名称ゆかりの人物で、アルダス工房の編集者であり、著者である。しかしながら『海の都の物語』の魅力は、印刷出版史にゆかりのある人物が登場するという目的視点的ではない。ヴェネツィアの歴史を俯瞰してみたとき、歴史上の人物たちの立ち位置が1000年のなかで点として描かれ線として繋がっていく文脈、そこに本書最大の魅力がある。

『世界を変えた書物』

= THE BOOKS THAT CHANGED THE WORLD』

山本貴光 著，橋本麻里 編，小学館，2022



本書は、2022年、金沢21世紀美術館で開催された展示「世界を変えた書物」に併せて刊行され、図録という編集体裁を遙かに越えた「知の系譜」といえる1冊だ。掲載されている書物は、金沢工業大学が所蔵する世界の歴史的貴重書、コペルニクス、ガリレイ、ニュートン、アインシュタインといった著名な学者の初版本で、その書影も鮮やかに、内容を分野ごとに切り分け1冊1冊が1ページ、2ページ単位で構成され、わかりやすく丁寧な解説がなされている。目次を見れば、宇宙論、解析幾何学、重力、物質・元素、電気・磁気、非ユークリッド幾何学、量子論にまで領域分野は及んでいる。そしてそれらが、それぞれの領域の枠組みを越えて書物同士の関係性にまで言及されており、まさに「知の系譜」そのものといえるのである。著者は現代の西周と称される百学連環・博覧強記の文筆家山本貴光。編集は日本美術にとどまらず古今東西の美術工芸を現代の視点でエディットし続ける橋本麻里、という最強の布陣。

小野二郎著作集2『書物の宇宙』

小野二郎著，晶文社，1986



今や老舗と称しても差し支えない文芸出版社、晶文社。本書はその創設者であり明治大学文学部教授でもあった小野二郎の著作集からの1冊。小野はイギリスを中心とした文学評論とアーツ・アンド・クラフツ運動を牽引したウィリアム・モリス研究の第一人者として知られている。西洋における印刷出版と書物史、書物論、活字史は寿岳文章、庄司浅水ら西洋文学を基盤とする文学者、書誌学者、または印刷人を軸に戦前よりいくつもの書物が出版されてきた。これらはデザイン領域を含む書物でありながらも、書誌学、または印刷（工業）という文脈で語られる（分類される）ことが多く、その充実した内容に反して知られることが少なかった。本書もウィリアム・モリス、イギリス文学という小野のイメージが先行し、やはりデザイン業界の中でページが開かれることは稀であったように思う。『書物の宇宙』は、20世紀初頭のイギリスのタイポグラフィを軸に、印刷出版、活字制作者の紹介や彼らに関するテキストが余すことなく記されている。そして本書を読むことで、翻訳を基盤とする戦前戦後の多くの著作の源泉が、英国の活字鋳造会社モノタイプ社のディレクター、スタンリー・モリスンの著作にあることをこの書物を読んで知るようになるのである。